



大連を訪ねて

呉 春美

2015年12月4日の宮陵会主催の講演会に出席するため大連を訪問した。大連に到着すると抜けるような青空に思わず深呼吸をする。市内のコンビニでは東京と変わらないほどの豊富な品揃えである。レストランでは魚介類が新鮮で美味しく、たちまち健啖家となる。「汚染された空気」や「危険な食品」というそれまで抱いていた中国のイメージは初日に払拭された。Seeing is Believing.「百聞は一見に如かず」である。

午後は武井克真氏（大連宮陵会）のご案内で、神奈川経済貿易事務所と東北财经大学の方愛卿教授を表敬訪問した。

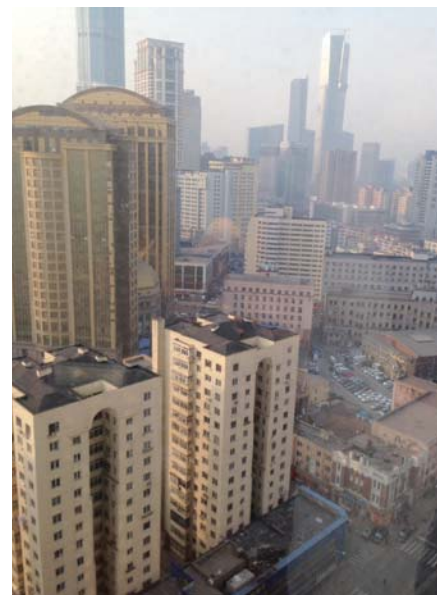
2日目は「グローバリゼーションと通訳・翻訳論」について講演をする。歴史的にも日本の関わりが深く、数多くの日本企業が進出していることから大連では日本語熱が高いようだ。そのため多くの参加者たちは東北财经大学や大連外国語大学などの日本語通訳翻訳科や日本語学科に所属する教員や学生たちだった。参加者たちは積極的にワークショップに取り組み、質問が絶え間なく続いた。中国人参加者たちの学ぼうとするその真摯な姿勢が印象的だった。

3日目は日系ホテルの支配人にヒアリングを行い、中国経済の現状、日本と中国のビジネススタイルの相違点や現地スタッフ対応の仕方など具体的なお話を伺うことができた。

午後は再び武井氏に大連駅や街の中心地を案内していただく。

大連は1905年日本の租借地である関東州の一部となり、1906年には南満州鉄道の本社が置かれ、さまざまな事業が展開された。大和ホテルがある中山公園の周りには現在も多くの日本企業が現地本社を置き、日本的な雰囲気がある。また車窓から眺める大連の街は、ところどころ以前住んでいたヨーロッパを彷彿と

せ、はじめての訪問にもかかわらず、どこか懐かしい。大連では4.5%の経済停滞といわれながらも、建設ラッシュが続いている。車の渋滞も深刻である。ショッピングセンターや繁華街は都会的でありなが



大連の街並み

ら、その地下商店街はアジアの市場のようである。大連には東西の建築様式、過去と近代が混在している。

大連の街を歩きまわりながら、この都市の魅力について考えてみた。観光客は2004年の1600万人から2014年には5619万人と年々急増している。夏に集中しているのは避暑のためである。たとえばスコットランドの「エジンバラ・サマーフェスティバル」のようにコンサートや舞台などを開催し、公園や通りには彫刻を置くなど工夫をこらしてはどうだろう。大連が「文化都市」として魅力を増せば、さらに観光収入も見込まれる。また大連は、神奈川大学の提携校である東北财经大学をはじめ14の大学がある学園都市でもある。遼寧省は横浜と提携している。産学共同プロジェクトも可能ではないだろうか。

1929年日本軍によって建設された大連港の倉庫5号は、まるで横浜の赤レンガ倉庫のようだった。オフィスだけでなく、おしゃれな店やレストランが入り、その3階に「Loft」というジャズバーがあり、オーナーからお話を伺うことができた。彼は上海のように大連をジャズの楽しめる街にしたいが、家賃が高いため、思うように演奏家を呼べないのが悩みだという。武井氏はさっそく今年の5月に日本から知り合いのジャズピアニストをお招きし、「Loft」での演奏会を実現させた。今年の10月にも再度の演奏会が決定しているという。

この街の特徴を活かすとしたら「文化都市」ではないだろうか。今回はその可能性を実感した大連訪問となった。

（経済学部 アジア研究センター所員）



大連港5号倉庫